



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

— あいなん音故地新 —

便利さを憂う

世の中は、本当に便利になった。わからないことはネットやAIがすぐに教えてくれる。自分で調べるより、本を読むより、簡単で早い。便利なものが目の前にあれば使いたくなる。子どもが使うのも自然で当然や。ただ、その便利さと引き換えに、自分で考え、本を読み、観察し、時間をかけてひとつひとつ積み重ねる機会が、少なくなってしまうように思う。

挑戦して、失敗して、悔しい思いをする。思いどおりにならず、傷つく。それでも考え、工夫し、もう一度やってみる。その先にある「できた!」という喜びは、自分の力でやり遂げたという自信になり、これから生きる土台になるものやと思う。大人になったとき、その土台が自分の支えになる。

便利になりすぎたことで、子どもたちの想像力や観察力、感性、忍耐力が、十分に育たないまま大人になってしまうんじゃないかと、私は憂いとする。

子どもたちの十年後、二十年後を思いながら、私たち大人は何を与え、何を「あえて与えない」のか。今、考える必要があるかもしれない。

(テノヒラkiku)



御荘文化センター図書室より

“9月の新着図書ピックアップ”の紹介

【伝記絵本】

『レイチェル・カーソン物語 なぜ鳥は、なくなかったの?』

ステファニー・ロス・シソン(作) / 新潟西村書店(発行)

ペンシルベニア州スプリングデールの自然と工業地域の交差する地で、家族経営の農場に生まれた少女。農場を探索し、自然のリズムの中で暮らしていた。ある時、鳥が歌うのをやめ、自然が声を失いはじめたことに気づく。いったいなぜ? だれのせいで? 『沈黙の春』の著者の生涯を、可愛い絵と工夫を凝らした構成の絵本でどうぞ。



【小説】

『鳥と孔雀』

津原 泰水(著)

河出書房新社(発行)

令和4年に早逝した著者の短編集。タイトル、収録作品、掲載順にいたるまで、生前の著者本人が決めたもの。1998年発表のものから最晩年(2022年)の作品、さらには書き下ろしまで、コロナ禍下の社会を希望と祈りを込めて書いた作品など、人情物、幻想文学、ミステリー、SFと、タイトルに使われた孔雀の羽のように、レパートリー豊富で鮮やかな14の作品群。



御荘文化センター図書室では、毎月「御荘文化センター図書室だより」を発行しています。

図書室だよりを通じてピックアップ図書以外の新着図書情報やそのほか新しい情報を皆さまに発信しています。町のホームページにも掲載していますので、ぜひご覧ください。



愛南町
ホーム
ページ